

日本語で修士論文を書く留学生向け「問い」の鍛えかた

鍋島, 有希

<https://doi.org/10.15017/7388820>

出版情報 : 大学院からはじめる社会学研究 : 問いを鍛える作法 : 三隅一人教授退職記念論集, pp. 56-68, 2025-10-01. 三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン :
権利関係 :



日本語で修士論文を書く留学生向け「問い」の鍛えかた

Sharpening Your Research Questions for International Students

Writing a Master's Thesis in Japanese

鍋島 有希

◎本章のねらい

本章は、自身の社会問題への関心から研究テーマを定め、社会的問いを立て、それを学問上の議論に位置づけるまでの全体像を示す。具体的には、日本語教育分野における関心事である外国人労働者の言語能力を題材に、社会的な問いを形成するプロセスを例示し、他分野から初めて社会学に挑戦する留学生の手引きとする。

◎とくに読んでほしい人

- ・日本の大学院で、日本語による修士論文執筆に取り組む留学生
- ・入試時に作成した研究計画をどのようにブラッシュアップすればよいか悩んでいる人
- ・日本語で書かれた先行研究をうまく探せず、収集しても効果的に整理・活用できない人
- ・ゼミで有意義なコメントをもらう方法に悩んでいる留学生

1. 他分野から社会学へ専攻を変更した外国人留学生

日本の大学院に留学して初めて社会学を専攻する外国人留学生は、新しい学問領域への挑戦と日本語や英語という外国語で論文を執筆する挑戦に対する期待と不安があるだろう。本章が主な読み手としているのは、研究計画書をもとにこれから研究を進め、日本語で修士論文を執筆する留学生である。

研究には、大きく分けて二つの始めかたがある。ひとつは、学術的な概念や理論に興味を持ち研究を始める方法であり、もうひとつは、特定の社会課題に対する問題意識を研究の出発点とする方法である。それぞれのアプローチによって、修士論文の完成に至るまでに直面する課題や、円滑に進められるプロセスが異なる。

前者のように、理論や概念に興味を持ち研究を始める場合、既存の議論や問いから研究テーマを選ぶため、先行研究の整理がしやすく、問いを立てたり研究課題を明確にしたりする

のも、それほど困難でない。しかし、社会の実践的な課題への貢献と結びつきにくいという悩みに直面する。一方、後者のように社会課題から研究を始める場合、社会的貢献に基づいた研究の必要性について述べやすく、実践的な提案が書きやすい。しかし、表面的には学術的な用語で説明しているように見えても、理論的な貢献が不明瞭であるために社会学的な研究意義が見えず、授業で提出するレポートのような印象になってしまうことがある。

今、この章を読んでいるあなたは、どちらのタイプだろうか。もし前者であれば、社会情勢への理解を深めたうえで、自身の研究テーマを実現できる調査フィールドを探してみるとよい。後者であれば、選んだテーマをさらに深く掘り下げ、学術的な問いを立てることが求められる。筆者自身は、社会的課題に関心を持ち研究を始めるタイプであり、後者の研究スタイルをとることが多い。そのため、理論的貢献に結びつけることにしばしば苦戦してきた。

本章では、実社会の事象に問題意識を持ち、そこから研究テーマを選び、そのテーマを学術的な議論の中に位置付けていくプロセスを解説する。筆者の試行錯誤の経験を交えながら、研究初期における問いの構築過程を丁寧に説明しているため、すでに研究テーマはあるが、どのようにブラッシュアップし研究として形にしていけばよいのか悩んでいる読者の助けになるだろう。また、ゼミ発表の資料を日本語で作成する際のポイントにも触れているので、参考にしてほしい。

「問い」を鍛えるとは

日常会話において「問い」という言葉は、一般的にふたつの意味で用いられる。ひとつは、広義の意味で問題意識を問うものである。たとえば、「あなたの研究の問いは何か？」と尋ねられ、「なぜ日本社会の多文化共生が実現しないのか」と答えるように、研究テーマにおける課題意識を示す場合である。もうひとつは、特定のテーマに関する研究の議論から生じる疑問や矛盾点を軸にした、より具体的な研究課題のことである。この場合の問いは、研究方法や分析に結びつけられるほど明確であり、オリジナリティがあり、かつ理論的・実践的な意義を備えている必要がある。本章で扱う「問い」は、この狭義の意味におけるものである。

問いを「鍛える」プロセスを大まかに示すと、1)社会学的な理論や概念を探す、2)先行研究を批判的に読み、問いを作る、3)社会学的な研究意義を検討する、という3つの作業から構成される。時系列に沿って記述すると一見直線的なプロセスに見えるが、実際には、オリ

ジナリティの欠如、理論的貢献の有無、調査の実行の可能性などを検討しながら、このプロセスを何度も往復しつつ、問いをブラッシュアップしていくことになる。つまり、「問い」を鍛えるとは、研究課題を洗練させるための作業である。

2. 社会学的な理論や概念を探す

2.1 筆者の社会学的概念との出会い

関心のあるテーマに学術的なキーワードを結びつけることは、意外に難しい。筆者は、日本で働く外国人労働者の言語とキャリアの関係に関心を持ち、日本語能力は本人のキャリアに影響を与えるだけでなく、第二世代のキャリア形成にも深く関わる重要な問題だと考えていた。今でこそのような考えを言語化できるようになったが、研究を始めた当初は、研究の焦点をうまく絞れず、さまざまな理論や概念を調べても、どれもしっくりこない時期が長く続いた。そんな折、幸運にも「地位達成理論」に出会うことができた。

簡単に説明するならば、地位達成理論とは、親の社会階層が子の社会経済的背景に影響し、親の階層が低い場合、その不平等が再生産されるというものである（Blau and Duncan 1967; Featherman and Hauser 1978）。この理論を知るきっかけとなった最初の出来事は、大学院時代に受講した質的調査方法論の授業中の雑談だった。当時、講義を担当なさった谷富夫先生が、ご自身の研究やフィールド調査の経験に触れながら、「オールドカマーの社会的階層が上がるには三世代ほどかかる」という話をされたのである。講義の本題から少し外れた短い雑談だったが、「外国人労働者の言語教育」や「移民の子どもの教育」に関心があった筆者は、そのような理論があるのかどうか調べてみようと思い、ノートにメモを残した。

その後、日本社会学会の年次大会に参加する機会があり、会場内を歩いていたところ、偶然通りかかった教室で教育格差に関する発表が始まるのを見かけ、聴講することにした。その発表では、地位達成理論に基づき、日本社会における親の階層と子の教育達成の関係を統計的に分析した内容が報告されていた（藤田 2016）。筆者の当時の理解と記憶では、その研究は「父親の学歴が子の教育達成に最も強い影響を与える」という結果を示していた。

筆者は、この研究発表を聴きながら「日本に住む外国人の場合も同じような傾向が見られるのだろうか」という疑問を抱いた。

その後、インターネットで理論を調べ、さまざまな論文を読むうちに、地位達成理論の枠組みを使えば、外国人労働者の言語教育と子どもの教育という一見別々の問題を、ひとつの枠組みの中で扱えるのではないかと感じるようになった。このようにして、当初は漠然とし

ていた研究のアイデアが、大学院の授業や学会発表を聴講する経験を通じて、「第二世代の教育達成」という具体的な社会学的概念へと結びついていった。

では、読者の皆さんは、自身の研究テーマに活用できる理論や概念を、どのように探していけばよいのだろうか。筆者としては自身の経験から、日本社会学会や日本教育社会学会等の年次大会に参加し、自分の関心に合う研究や理論を探すことを勧めたい。ただし、大学院生にとっては時間的・金銭的な制約もあり、タイミングよく学会参加できないこともある。そのため、学会での偶然の出会いや発見に恵まれる機会は限られている。そのような場合には、まずウェブを利用して、文献検索を行うことになるだろう。ただし、研究を始めたばかりの留学生にとっては、日本語での文献探しに時間がかかることや、検索のしかたがうまくいかず、思うように文献が見つからないことも少なくない。そうした状況が続くと、つい母語で文献を探すようになり、収集する研究に偏りが生じる可能性がでてくる。このような状況を回避するため、以下では、日本語でのウェブ検索ツールと AI を用いた文献検索の方法を紹介する。あわせて、アイデアに行き詰まりを感じた時の図書館の利用方法について紹介する。

2.2 関心事に合う理論や概念の探しかた

日本のウェブ検索ツールで文献を探す方法

ウェブサイトの検索バーを使って文献を探す際に注意すべき点は、自分の研究テーマに関連するキーワードばかりを入力して検索しないことである。たとえば、「日本における外国籍の子どもの教育」について研究したい場合、「外国人・日本・子供・教育・研究・論文・社会学」のような用語を並べても、適切な論文はほとんど出てこない。母語で検索する場合も類似した事象が起こるだろう。たとえば、「中国のサイトなら先行研究がたくさん出てくる」という場合、研究対象やテーマは似ていても、実際に論文をよく読んでみると議論の焦点が異なっていることがある。このような状況が起こる多くの場合も、関心のある言葉だけで検索していることが原因である。これが所謂、「先行研究が見つからない」の状態である。もちろん、実際に自身の研究テーマに新規性がある可能性もあるが、たとえそうであっても、社会学的な議論の中に研究を位置づけるためには、既存の先行研究との関係を明確にすることが不可欠であり、そのためにはある程度の関連文献を見つける必要がある。

では、どうすればよいのか。それは、関心のあるテーマの言葉で検索するのではなく、その調査を通じて何を議論したいかに基づいて検索するのである。たとえば、先述した研究テ

一マの場合、「地位達成・第二世代・要因」のように、研究対象そのものではなく、それを通じて明らかにしたい理論的な論点に関わるキーワードで検索するのである。つまり、検索では「調査対象」ではなく、「その研究対象を調査することで何を知ろうとしているのか」に焦点を当て、その内容に関連する用語を入力することが重要である。この方法を用いることで、自分の研究に関連する文献が見つかりやすくなるだろう。実際、筆者もこの方法によって教育達成に関わる論文を多数入手することができた。

AI を使った検索方法

次に、AI を使った方法を紹介する。筆者は、論文の検索や情報収集の手段のひとつとして AI を活用している。ここ数年、多くの AI ツールが登場し、それぞれが競うように進化を続けている。たしかに、AI を使うと情報の収集や整理する時間は短縮できる。しかし、それによって研究が「楽」になるかという点、必ずしもそうではない。以下では、研究に AI を役立てる際に重要となるポイントと注意点について述べる。

まず、ウェブ検索と同様に AI を使って情報収集をする場合、上述のように、「何を議論したいのか」に焦点を当て、研究論文を提示するよう尋ねるとよい。この時、より有用な回答を得るためには、研究テーマの背景や関心のある論点について、具体的かつ詳細に入力することが重要である。適切に問いかければ、その研究分野で著名な研究論文の要約や関連情報を含めて出してくれるだろう。ただし、ここで注意すべき点はいくつかある。

第一に、AI が提示した情報を鵜呑みにしないことである。AI はインターネット上の情報をもとに、もっともらしい回答を確率的に生成して提示している。たとえば、「富士山の高さは何メートル？」と尋ねると、AI は「3776m」と回答するだろう。これは、インターネットにその情報が多く存在するためである。もし間違った情報が広く流布していた場合、その出現頻度に基づいて誤った回答が提示されることもある。こうした問題は、流通する情報が古い場合にも生じる。「最新の研究を教えて」と AI に尋ねても、有料購読や会員限定の制限により、最新の質の高い論文を取得できず、代わりに信頼性の不明なウェブ記事から情報を抜き出してくることもある。そのため、AI が提示した情報の引用元や出典を必ず確認する必要がある。一見、学術的な論文名が示されていても、実際に URL を辿ると、全く別の論文やブログ記事だったということもある。AI の精度も高くなり勝手に AI が情報を形成して提示することは少なくなりつつあるが、それでも、AI を文献検索に活用する場合、実際にその論文が存在するのかを、自分の目で確認できるまで徹底的に調べ、研究目的として使用

できる内容かを自ら評価する必要がある。

第二に、自分が AI に入力した文章が、AI の学習データとして保存・利用される可能性がある点である。前述のように、文献検索において AI から適切な回答を得ようとして、自分の研究テーマに関して具体的に入力したとする。そして、他の大学院生があなたの研究と似たテーマで「修士論文書きたいのだけど、いいアイデアないか？」と AI に尋ねると、あなたが文献検索のために必要事項として入力した研究のアイデアが解として提示される可能性がある。

大学によっては、機関として AI ツールを契約し、機密情報の漏洩を防ぐ対策を講じている場合もある。しかし、現段階でそのような対応を取っている大学は限られている。また、個人で有料の AI ツールを利用している場合でも、適切な設定や管理を行わなければ、情報が AI の学習データに取り込まれる可能性があるため、十分な対策が必要となる。

以上のように、文献検索のプロセスで AI を利用するならば、提示された引用の一次資料にあたり内容を精査できる見識と機密情報に対するリテラシーが必要となる。SNS 上で「AI を駆使すれば簡単に論文が書ける」といった情報を見かけるが、AI を使えば楽ができるという考えは誤りであるということを強調しておきたい。

アイデアに詰まったら図書館へ行こう

インターネットで検索が進み、ある程度の資料や情報が集まってくると、ダウンロードでは入手できない図書や論文が多くあることに気づくだろう。そのような段階になりようやく図書館に足を運ぶという留学生も少なくない。しかし、図書館には、書籍だけでなく、主要な学会の学会誌や大学・研究機関が発行する紀要等も所蔵されている。そのため、研究のアイデアに行き詰りを感じた時には、図書館を訪れて所蔵資料を立ち読みすることをお勧めしたい。

図書館を散策し、所蔵されている多種多様な学会誌をパラパラとめくりながら、キーワード探したり、先行研究になりそうな論文を探したりするのは、雑貨屋や骨董市で掘り出し物を探すような楽しさがある。ときには研究とは全く関係のない心理学系の雑誌に面白い実験がなされた論文を発見することもあり、時間を忘れて論文を読んでしまうこともある。

主要学会誌に掲載されている研究論文は難しくて理解できない場合は、大学や研究機関の紀要を読んでみよう。紀要には萌芽的な研究や事例研究等、比較的読みやすく実践に近い内容の論文が多く含まれており、新たなアイデアの着想に繋がることもある。このように、

図書館は資料検索で蔵書確認した本を取りに行く場所ではなく、少し息抜きするような気持ちで訪れることで、研究のヒントを楽しく得られる場所にもなる。考えることに疲れてしまったら、先人の知恵を借りて気分転換をしよう。

研究で議論したい内容と合致する理論や概念を決めよう

自分の関心に近い論文が集まったら、それらを自分なりのカテゴリーに分類し、その中から、自分の研究テーマと合致する理論や概念を選び出そう。筆者自身の例を挙げると、学会で偶然出会った概念が自分に合っているかもしれないと思い、その直感が正しいかを確認するために文献収集を行った。そして直感は正しく、地位達成理論が自身の研究テーマに適していると思われた。また、資料の整理する過程で「教育達成」という概念が、自分の議論の焦点と合致していると分かり、研究に用いる中心的な概念として採用することにした。

課題 1) 自分の関心のあるテーマについて、どのような理論や概念があり、それに関してどのような研究があるのかを 100 字くらいで書いてみよう。

3. 先行研究を批判的に読み、問いを作る

論文を読みながら、未解決な部分を探し、自分なりに思考を深めて新たなアイデアを考えることを「批判的に読む」という。「批判」と聞くと、論文の欠点を探して批評することのように思われるかもしれないが、そうではない。むしろ、その論文を土台として、次のような研究を展開できるかを前向きに検討するために、未解決な部分を見つけ出す行為である。そして、この批判的な読みかたは、一見すると容易に思えるかもしれないが、実際には難しい。

筆者が論文を批判的に読む際には、頭の中で他の先行研究の結果と比較したり、異なる理論からのアプローチの可能性を検討したりしながら、次の研究につながりそうな部分を模索している。こうした読みかたには、該当研究で用いられている理論だけでなく、他の理論や先行研究についての幅広い知識が必要となる。したがって、初めて社会学の研究に取り組む学生にとっては、批判的に論文を読むこと自体が大きな挑戦となる。ただし、過去の経験や社会情勢に関する知識が、暗黙のうちに批判的思考を後押しする場合もある。

筆者は、第二世代の教育達成における親の影響には、日本語能力が含まれるのではないかという推測のもと、先行研究を探し始めた。その結果、Bourdieu (1991) の言語資本に関す

る研究や、2010 年代以降に発表された移民の第二世代の地位達成に関する文献をいくつか入手することができた。中でも、是川（2018）は、筆者の関心に最も近いものであった。

この研究は、国勢調査のデータを用い、日本に居住する子どもの高校進学と、両親の国籍の違いとの関連を分析している。分析の結果、母親が外国籍である場合、両方とも日本国籍である場合に比べ、子どもの高校在学率が低い傾向が示された。さらに、在学率の差の背景として、母親が外国籍である場合は文化的要素が、父親が外国籍である場合には経済的要素が影響を及ぼしていることが明らかにされた。これらの結果から、是川は、移民第二世代の教育達成の低さは親の文化的・経済的要素に起因し、それは子どもが「第二世代であること」自体と密接に関わると述べ、日本における移民の階層的地位の低さの再生産は、同化理論で想定されるプロセスと異なると指摘している。そして、実践的提案として、子どもへの日本語教育支援の必要性にも言及している（是川 2018）。

筆者がこの論文を初めて読んだとき、その研究結果に強く共感し、まるで自身の考えを代弁してくれているように感じた。同時に、私のやろうとしていた研究はすでに行われているから、もう私がこの研究する余地はないとも感じた。しかし、しばらく冷静になって考えてみると、是川論文は「両親のどちらかが外国籍であること」が子どもの高校在学率に影響を与え、父親と母親とは異なる要因が作用していると述べているものの、直感的にはその結果が実社会を十分にとらえていないようにも思われた。

実際、日本語能力の低い親の通訳のために、頻繁に学校を欠席せざるを得ない外国人児童生徒が存在する。外村（2023）は、外国籍の両親を言語面で支援する「ヤングケアラー」としての役割が、外国人児童生徒の進学に影響を与える可能性を指摘している。このテーマは、日本語教育分野でも多く議論されており、佐藤（2021）や徳永（2020）も、親の日本語能力や家庭での使用言語や教育観が子どもの進学や学力に影響すると指摘している。

このように、日本語教育分野の研究では、子どもの教育達成に影響を与える要因として、親の言語能力や家庭内での言語使用・言語教育観が重視されている。筆者もまた、この観点から、父親か母親かという性別の違いよりも、親の言語能力そのものが本質的な要因である可能性を考えるに至った。こうした考えのもと、改めて是川論文の分析過程を精読すると、親の言語能力は分析対象から外れており、検証されていないことが明らかとなった。

完璧に見える論文であっても、社会問題や、異なる学問領域の知見を踏まえることで、その限界や新たな研究の可能性を見出すことができるのである。

先行研究の議論を整理し、問いの種を抽出する

多くの先行研究を批判的に読み進めていくことで、小さな発見が積み重なり、それらがやがて問いに繋がるアイデアへと発展していく。ここでは、そうした「問いの種」を抽出するための具体的なプロセスを紹介する。

日本の論文には「研究論文」「研究ノート」等、いくつかの種類がある。中でも研究論文には、先行研究における議論が必ず丁寧に記述されているため、要約もしやすい。一方、研究ノートの場合、論文の種別として新規性や速報性に特徴があることや調査経過の報告が目的である場合もあり、先行研究レビューのような論文を除いて、議論の文脈が明確に書かれていないことがある。そのような場合は、自分なりに議論の構造を読み取り、マッピングすることになる。

ここで言う「マッピング」とは、研究の議論を中心に据え、軸を決めて各論文を位置づけていく作業である。たとえば、「子の教育達成に対する親の影響」を議論の焦点にする場合、「どのような要素や条件が影響を与えているのか」を軸に、それらをどのように対立的に整理できるのかを模索していく。筆者は普段、収集した論文とその要約をデジタルで管理しているが、マッピング作業を行う際には、文献をすべてプリントアウトし、机に広げて自分の手で並べ替えながら、議論の文脈や構造を考えるようにしている。また、分析結果や議論の対立を検討する際には、その根拠となる記述部分にハイライトをつけておき、並べて見比べながら、本当に議論の対立が成立しているのかを検証している。非常にアナログな方法ではあるが、情報の見落としを防ぐことができるため、筆者はこの作業方法を気に入っている。

このようなプロセスを丁寧に繰り返していくと、次第に先行研究の中に含まれる矛盾や未解決の問いが浮かび上がってくる。こうして見つけた「問いの種」を、自分の言葉でうまく文章に転換していくことで、ようやく研究における「問い」が形成される。

課題 2) 研究テーマに沿うように先行研究の議論を整理しよう。その中から問いを作ってみよう。

4. 社会学的な研究意義を考える

問いを見つけることに成功したら、次に、自分のアイデアを指導教員や仲間に分かりやすく伝える準備をしよう。その際には、これまで辿ってきたプロセスを説明するだけでなく、自分の問いが社会的にどのような意味を持つのか、つまり、「社会学的な研究意義」を明

確する必要がある。研究意義を説明する際のポイントは、大きくふたつに分けられる。「この問いをなぜ扱う必要があるのか」、「この問いに答えることで、理論的にどんな良いことがあるのか」を論理的に説明することである。

まず、「この問いをなぜ扱う必要があるのか」を説明する際には、問いが未解決であることをどのように見出したのか、その根拠を具体的かつ丁寧に説明することである。たとえば筆者の場合、親の言語能力に着目したわけだが、その根拠を単に「ニュースでその内容を見た」等とは語るのではなく、実社会で観察される事象や、日本語教育分野における既存研究の議論を提示するのである。たとえば、本来、大人が担うべき家族の介護等を担う児童生徒（ヤングケアラー）の存在は社会的にも広く知られているが、外国籍の親の言語的支援を担う第二世代のヤングケアラーが存在することは、まだ十分に知られていない。こうした実際に存在する社会課題に加えて、日本語教育分野における議論を紹介することで、社会学の立場からも問いとして扱う意義を理解してもらいやすくなる。

次に、「この問いに答えることで、理論的にどんな良いことがあるのか」を説明する場合、自分の研究によって明らかにされるものが、先行研究に対してどのような新しい知見を加えることができるのかを説明する。たとえば筆者の焦点である親の言語能力について、「言語能力という人的資本が、親の性別に関係なく子の教育達成に影響する」という結果が得られたとすれば、文化的要素を性別によって分ける従来の枠組みは不十分である可能性があるといった新たな視点を提示することができる。もしも、このような理論的貢献がうまく説明できない場合は、問いの立てかたや、文献の整理にどこか無理がある可能性がある。そのようなときは、これまでのプロセスをひとつずつ遡って見直し、論理構成や問いの焦点を調整することで、明確な研究意義が見えてくるはずである。

課題 3) あなたの問いを明らかにすることは、社会学における議論においてどのような意義があるのかを説明しよう。

5. ゼミで報告しよう

研究の問いを他者に伝えるためには、前節で述べたように、問いの背景とその理論的・実践的貢献をあわせて示すことが不可欠である。こうした説明があつてこそ、指導教員や仲間からの理解や共感を得ることができるようになる。「問いを鍛える」ということは、前述のプロセスを何度も繰り返しながら、問いの形を少しずつ整えていく作業にほかならない。と

きには、思うように理論的な貢献を説明できず、テーマ設定の段階まで立ち返って、研究の出発点そのものを見直すこともある。また、問いとの関係がより明確な先行研究を再度探す必要が生じることもある。このように、「問いを鍛える」プロセスは、決して直線的に進むものではない。迷ったり、立ち止まったりしながら、少しずつ洗練されていくものである。

そうした試行錯誤の過程において、大きな気づきを与えてくれたり、自分では見えなかった視点を教えてくれたりするものが、ゼミという場である。ゼミでの報告は、問いを言語化し、他者に伝えるための絶好の機会であり、自分の研究をブラッシュアップするための大切なステップとなる。

以下、ゼミ報告において必ず必要となる先行研究レビューの書きかた、そして留学生が苦勞する日本語での文章作成のコツについて紹介する。

先行研究レビューの書きかた

ゼミではこれまで収集した先行研究をレビューし、自身が考えた問いについて報告する機会があるだろう。先行研究のレビューの基本的な書きかたは、「研究対象」ではなく「議論の内容」ごとに整理することである。簡単に言えば、「○について A 論文では××と述べている。一方、B 論文では△△と主張している」のように、議論の焦点を軸に論文を並べていく形式が望ましい。

しかし、留学生によく見られるのは、「○の研究は欧米諸国を対象としているが、アジア地域を対象とした研究は少ない」のように、国や地域ごとに研究を分類する書きかたである。比較研究として国や地域の違いを分析する場合には、有効な整理方法だが、比較を目的としない場合には、その後の考察で議論を十分に展開できなくなる恐れがある。

こうした問題を回避し、議論の内容に基づいたレビューを書く力を身に着けるための最も効率的な方法のひとつは、自身の研究テーマに関連する書籍や論文で、先行研究がどのように整理されているかを参照することである。ここで重要なのは、文章をそのまま模倣するのではなく、文章の構造や書きかた、表現方法を学ぶという点である。例えば、みなさんは「つまり」や「すなわち」という表現を多用していないだろうか。これらがどのような場合で、どの程度の頻度で用いられているのか、実際の文章で確認してみよう。

筆者が、効果的な文章表現を習得する際、駒井・是川（2019）『人口問題と移民』の著書が非常に参考になった。この本では、移民の地位達成をめぐる地位達成理論について、移民の同化仮説から問いの形成までのプロセスが丁寧に書かれており、議論の整理や展開を執

筆するうえで大きな手がかりとなった。もしこのような良書に出会うことができたなら、購入して手元に置いておき、何度も読み返して、文章の構造がどのようになっているか、どんな文章表現が使われているかをじっくり分析してみよう。

学術的な日本語を書くために

日本人の大学院生であっても多くの場合、修士論文を書くことは初めての経験であり、アカデミックな日本語の書きかたを新たに学ぶ必要がある。つまり、学術的な文章表現は、国籍を問わず、誰もがゼミ発表の資料作成を通じて徐々に習得していくと言っても過言ではない。とはいえ、実際に外国語である日本語を使って修士論文を書くことは、留学生にとって非常に大きな挑戦である。筆者は、所属大学で留学生向けのライティング・センターの運営に関わっているが、ゼミの発表資料、修士論文、時には博士論文や投稿論文を持ち込み必死に文章を改善しようとする留学生の姿に、日々感銘を受けている。

アカデミック・ライティングの支援に携わる者として伝えたいのは、母語と日本語を場面に応じて使い分けることの大切さである。そもそも論文執筆は、思考力が基盤にあり、言語はあくまで思考を表現する手段にすぎない。研究を進める際には、自分が最も考えやすい言語を柔軟に使うことで、思考の質を高めることができる。たとえば、問いの種を見つける段階では、多くの人は頭の中で思考錯誤を繰り返すが、その際に日本語以外の、深い思考が可能な言語を用いているのであれば、メモや問いの下書きもその言語で行って構わない。そして、その下書きに書かれた内容を客観的に見直し、論理の誤りや説明不足を確認したうえで、最終的に日本語に変換すればよい。

ただし、このプロセスには、ふたつの点に注意が必要である。第一に、下書きをするときに完璧な文章を母語で作らないことである。たとえば、中国語で整い過ぎた文章をそのまま日本語に翻訳すると、構文や語順の違いから冗長で不自然な日本語になってしまう。そのため、下書きの段階では、「日本語を書くつもり」でアイデアをまとめるようにしよう。

第二に、AI 翻訳に頼りすぎないことである。AI に翻訳を任せれば、不自然な表現を修正し、文法的に正しい日本語に整えてくれる。入力した文章が不完全である場合も、文脈を補って仕上げてくれるだろう。しかし、こうした便利さゆえに、書き手の意図とは異なる内容に変換されたり、本来伝えたかった微妙なニュアンスが失われたり、文意がずれてしまうことがある。こうして完成した文章を精査せずに指導教員に提出したらどうなるか、自分自身で想像してほしい。

こうした AI 翻訳での誤訳や誤解を未然に防ぐためにも、大学にライティング・センターのような施設があれば、ぜひ積極的に利用してほしい。自分の言葉で書いたものをそのまま持っていくとよい。たとえ日本語に多く誤りがあっても、内容に筋が通っていれば、支援者は書き手の意図を汲み取り、適切な表現への修正を手助けしてくれる。こうして支援を受けながら作成したレジュメは、指導教員や仲間にとって読みやすくなり、的確なフィードバックが得やすくなる。結果として、問いの鍛錬がより円滑に進み、研究の質を高めることにつながるだろう。

文献

- Blau, Peter M., and Duncan, Otis D., 1967, *The American occupational structure*, New York: Wiley.
- Bourdieu, Pierre, 1991, *Language and Symbolic Power*, Translated by Gino Raymond and Matthew Adamson, Cambridge: Polity Press.
- Featherman, David. L., and Hauser, Robert M, 1978, *Opportunity and change*, New York: Academic Press.
- 藤原翔, 2016, 「中学生の進路希望の格差・不平等へのアプローチ——中学生と母親パネル調査 (JLPS-J) データを用いた分析 (1)」第 89 回日本社会学会大会.
- 駒井洋・是川夕 (編著), 2019, 『人口問題と移民—日本の人口・階層構造はどう変わるのか』明石書店.
- 是川夕, 2018, 「移民第二世代の教育達成に見る階層的地位の世代間変動—高校在学率に注目した分析—」『人口学研究』54: 19–42.
- 佐藤郡衛, 2019, 『多文化社会に生きる子どもの教育』明石書店
- 徳永あかね, 2020, 「多言語環境家庭の「親」をめぐる研究の概観と今後の課題」『神田外語大学紀要』32, 87–99.
- 外村佳代子, 2023, 「ヤングケアラー支援のための概観と現状—日本人と外国人児童生徒の学力保障の担保についての考察—」『Kokusai-Joho』8(1): 41–46.